

酒造好適米の需給状況及び需要量調査結果（変更）の概要

農林水産省では、酒造好適米の需要に応じた生産を行っていく上での判断指標となるよう、昨年7月から9月にかけて酒造好適米の需要量調査を実施し、調査結果と併せて、酒造好適米を取り巻く状況等について情報提供を行いました。その後、日本酒の製造計画の変更や平成28年産酒造好適米の生産量等によって、酒造好適米の需給状況が変化することから、昨年11月に改めて需要量調査を実施しましたので、その結果と併せて、酒造好適米の需給状況等について情報提供いたします。

I 平成29年酒造好適米の需給見通し

平成29年酒造好適米の需給状況については、今回調査の結果（別添「参考」参照）、農産物検査数量及び関係者からの聞き取り等により以下のとおりと見通される。

(1) 酒造好適米需要量（推計値）

平成29年酒造好適米の需要量は、一部の酒造メーカーにおける製造計画の変更等に伴い、平成28年と比較して約2千ト程度増加する見込みであることから、平成28年酒造好適米の需要量96～98千トに2千トを加えた98～100千ト程度と見込まれる。

(2) 酒造好適米の生産量（目安）

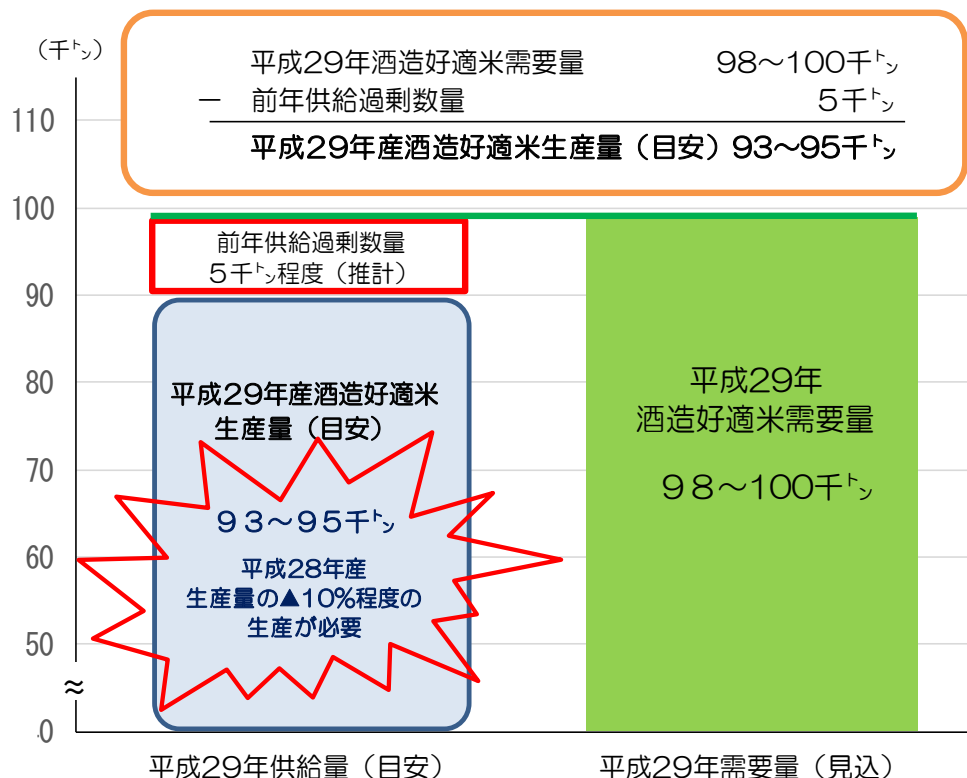
平成29年酒造好適米の需要量が98～100千トと見込まれる中で、現時点で平成28年から約5千ト程度の持ち越しが見込まれる。

このため、平成29年産の作付けに当たっては、平成29年の需要量98～100千トから当該持越分を差し引いた93～95千ト程度までの生産とする必要があると考えられ、直近の平成28年産生産量（推計）106千トと比較して約▲10千ト程度（平成28年産生産量の▲10%程度）の生産とすることが必要となる。

さらに、酒造好適米の需要量には、当初から特定名称酒の原料や麴米として使用を計画していたもののみならず、供給過剰分の縮減を図るため、本来、「かけ米」として使用する予定の主食用米や特定米穀などの一般主食用品種（うるち米）から酒造好適米へ振り替えるため、通常の酒造好適米の取引価格より低い水準で販売したものなども含まれていることから、こうした事情も考慮した上で、平成29年産酒造好適米の作付

けを行う必要があると考えられる。

平成29年酒造好適米の需給状況



【参考】平成27年及び平成28年酒造好適米をめぐる状況

<平成27年>

(1) 供給量

平成27年産酒造好適米の生産量（醸造用玄米検査数量ベース）は、平成26年産主食用米（うるち米）の取引価格が大幅に下落したこと等から、主食用米より高値で取り引きされている酒造好適米の作付面積が拡大したことに加え、作柄が良かったこと等に起因して、平成26年産より19千ト多い109千ト（対前年産比121%）へと大幅に増加。

(2) 供給過剰数量（推計値）

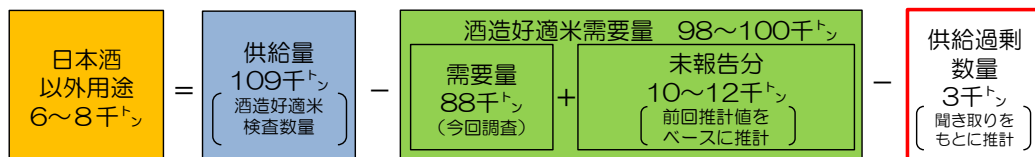
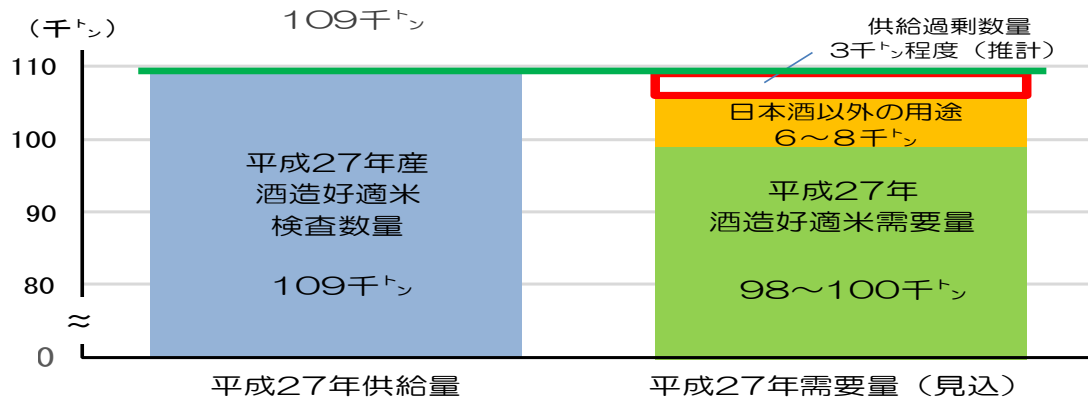
関係者からの聞き取りによれば、平成27年酒造好適米の供給過剰が見込まれたことから、産地においては、販売価格を引き下げて、通常、うるち米を使用している「かけ米」の代替や日本酒以外の用途向けに販売を行った結果、3千ト程度が平成28年に持ち越されているものと見込まれる。

(3) 酒造好適米需要量（推計値）

平成27年酒造好適米の需要量（実績見込）は、「かけ米」用等の原料と

して、追加購入があったこと等から、前回調査と比較して、1千ト増加の88千トとなり、未報告メーカー分の需要量を含め、98～100千ト程度と見込まれる。

平成27年酒造好適米の需給状況



＜平成28年＞

(1) 供給量

平成28年産酒造好適米の生産量（醸造用玄米検査数量ベース）を、農産物検査の進捗率を基に推計すると、約106千ト程度と見込まれる。なお、平成27年酒造好適米の供給過剰数量3千ト程度が持ち越されていると見込まれることから、合計109千ト程度が当面1年間に供給されると見込まれる。

(2) 酒造好適米需要量（推計値）

平成28年酒造好適米の需要量（見込）は、平成27年産酒造好適米を当初の購入計画以上に購入したことに伴い、平成28年産酒造好適米の購入数量を減らすケースが見受けられること等から、平成27年と比較して約2千ト程度減少する見込みである。したがって、平成27年需要量98～100千トから2千トを差し引いた96～98千ト程度と見込まれる。

(3) 供給過剰数量（推計値）

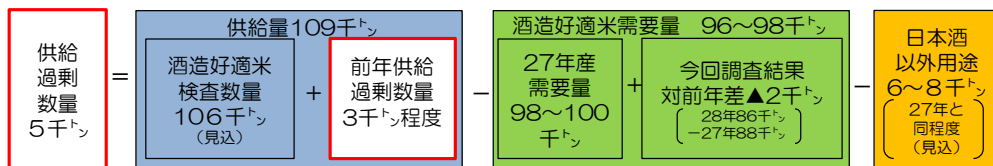
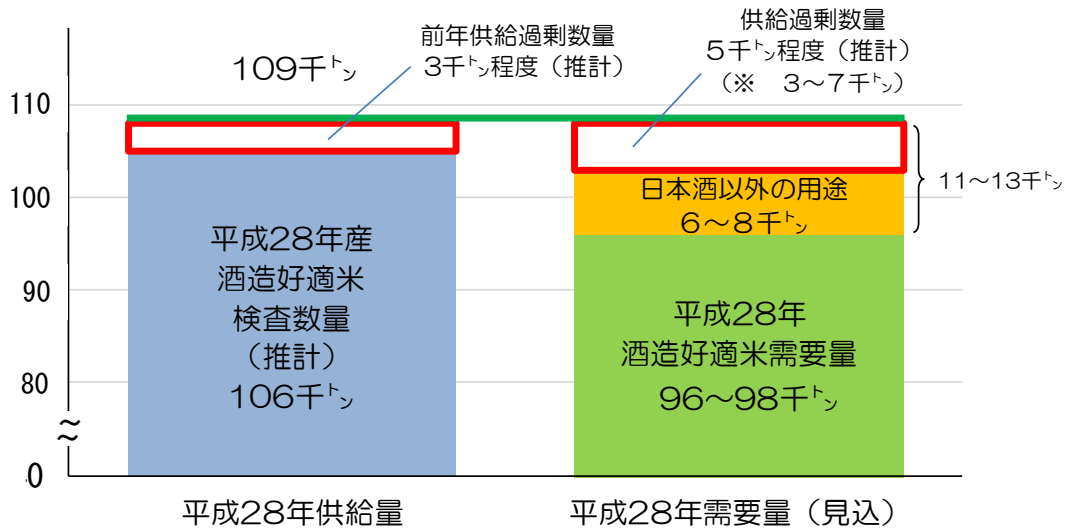
平成28年酒造好適米の供給過剰数量は、供給量109千トと需要量96～98千トの差11～13千ト程度が発生すると見込まれる中、過剰が見込まれる産地においては、過剰分を日本酒以外の用途に販売するなど、解消に向けた取り組みが行われている。

しかしながら、酒造好適米を日本酒以外の用途に使用する者は限定されるため、仮に平成27年と同程度の6～8千トが日本酒以外の用途に販売されるとした場合、現時点では、平成27年より約2千ト程度多い約5千ト程度が平

成29年に持ち越されるものと見込まれる。

なお、この供給過剰分の5千トンは、今後の販売状況等により変動することに留意する必要がある。

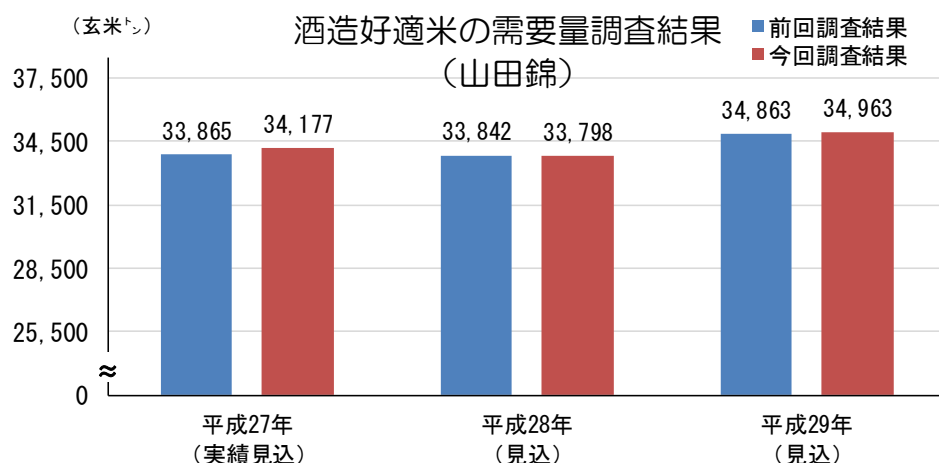
平成28年酒造好適米の需給状況



Ⅱ 主な産地銘柄の需要状況

＜山田錦＞

平成27年産の作柄が良かったこと等から、生産過剰となり、当初の購入計画以上に購入した酒造メーカーの中には平成28年産の購入数量を減らすケースがあったことから、平成28年需要量は平成27年と比べ、一時的に減少したものの、酒造適性に優れ、消費者の認知度も高いことから、酒造メーカーの需要が高まっている中で、平成29年の需要量は、平成27年を上回る水準となっている。



○ 山田錦における今回調査結果の状況

(単位:玄米㌧)

	需要量 (今回調査結果)		前年産との比較	
		うち兵庫県産		うち兵庫県産
平成27年(実績見込)	34,177	23,275	—	—
平成28年(見込)	33,798	22,895	▲ 379	▲ 380
平成29年(見込)	34,963	23,974	+1,165	+ 1,079

なお、前回調査との比較においては、製品の差別化を図るため、地元産酒造好適米に特化した製品を増やす酒造メーカーがあったことから、兵庫県産を除いた需要量は、すべての年において、前回調査を上回る結果となった。

一方、兵庫県産山田錦の需要量は、製造計画を下方修正する酒造メーカーがあったこと等から、前回調査を下回る結果となった。こうした中、平成29年は平成28年と比べ、大幅に増加しているが、平成29年産の作付けに当たっては、平成28年からの持越分を考慮する必要がある。

○ 山田錦における前回調査結果と今回調査結果の年産別比較

(単位:玄米㌧)

	前回調査結果①		今回調査結果②		差②－①	
	兵庫県産	その他	兵庫県産	その他	兵庫県産	その他
平成27年(実績見込)	23,279	10,586	23,275	10,902	▲ 4	+ 316
平成28年(見込)	23,134	10,708	22,895	10,903	▲ 238	+ 195
平成29年(見込)	24,010	10,853	23,974	10,989	▲ 36	+ 136

＜五百万石＞

五百万石については、山田錦などの他銘柄への需要の変化等により、需要量は減少する傾向が見受けられる。

なお、前回調査との比較においては、平成27年産及び平成28年産の作柄が良かったこと等から、一部の産地で安値で取引され、「かけ米」用等として当初の計画以上に購入した酒造メーカーがあったことから平成27年及び平成28年において前回調査を上回る結果となったが、平成29年においては、新潟以外の産地で他銘柄への需要の変化等により、前回調査を下回る結果となった。

なお、主産地である新潟県産の需要量は、製品の売り上げ増加を見込む酒造メーカーが、製造計画を前回調査から上方修正したことから、すべての年において前回調査を上回る結果となった。

○ 五百万石における前回調査結果と今回調査結果の年産別比較 (単位: 玄米ト)

	前回調査結果①		今回調査結果②		差②－①	
	新潟県産	その他	新潟県産	その他	新潟県産	その他
平成27年(実績見込)	11,398	10,527	11,588	10,617	＋ 189	＋ 90
平成28年(見込)	9,692	9,866	9,851	9,957	＋ 159	＋ 91
平成29年(見込)	9,493	9,809	9,951	9,623	＋ 458	▲ 186

○ 五百万石における今回調査結果の状況 (単位: 玄米ト)

	需要量(今回調査結果)	前年産との比較
平成27年(実績見込)	22,205	－
平成28年(見込)	19,808	▲ 2,397
平成29年(見込)	19,574	▲ 234

Ⅲ 終わりに

現在の酒造好適米の需給状況は、平成27、28年産と2年連続で生産過剰となりましたが、販売価格を引き下げるなどした上で、「かけ米」として販売したほか、日本酒以外の用途向けに販売するなど、産地の取り組みにより、平成27年産の出来秋時点と比較すれば、一見過剰感は薄らいでいるように受け止められるが、実際に、需給の均衡が図られたわけではありません。

酒造好適米を「かけ米」として代替使用できる数量には限りがあることや、日本酒以外の用途向けに販売することは、本来使用されていた米穀の需給を乱すことにもつながりかねません。

その上、酒造好適米は一般主食用品種（うるち米）に比べ、収量が低いため酒造好適米の値崩れは、酒造好適米生産者の経営を不安定なものにすることから、供給過剰が生じる度に、応急的な処理を行うようでは、酒造好適米の安定生産・安定供給に支障を来すおそれがあります。

したがって、平成29年産の酒造好適米の作付けに当たっては、今回の需要量調査結果を一つの指標として活用するとともに、持越在庫やこれまでの販売状況などを総合的に勘案の上、特定名称酒の原料や麴米としての需要に応じた生産量を確保できるよう、生産する必要があるものと考えられます。

今後、酒造好適米の安定生産・安定供給に向けては、先々の需要者ニーズをよりの確に把握し、種子の手当段階から計画生産に取り組むことが必要です。そのためにも、生産者と需要者の結び付き強化を図り、は種前に生産者と需要者が契約を行うことや、複数年契約の取組の拡大を推進することが重要と考えています。

また、作柄等の不確定要因による供給量の過不足を回避するため、生産者と需要者が連携し、ランニングストックを確保するなど、作柄変動等に対応する仕組みの構築が必要と考えられます。

最後に、日本酒原料米の生産及び実需の関係者がそれぞれの役割を果たし、安定的な取引の拡大が図られることを期待しています。

＜参考＞

酒造好適米の需要量調査結果（変更）の概要

昨年7月から9月にかけて全酒造メーカー1,500社を対象に実施した酒造好適米の需要量調査（以下「前回調査」という。）において回答があった955社に対して、昨年11月に改めて、前回から変更あった場合の需要量調査（変更報告）（以下「今回調査」という。）を実施しました。

前回調査結果をもとに、今回調査により報告があった157社分の需要量を更新し、再集計した955社の酒造好適米の需要量は以下のとおり。

各年の需要動向

＜平成27年＞

平成27年は、一部の酒造メーカーにおいて、「かけ米」用等として、当初の購入計画以上に酒造好適米を購入したため、前回調査より約1千トン多い88千トンとなった。

＜平成28年＞

平成28年は、平成27年と同様、「かけ米」用等として、当初の購入計画以上の購入を行った酒造メーカーがあったため、前回調査より約1千トン多い86千トンと見込まれる。（平成27年比▲約2千トン）

＜平成29年＞

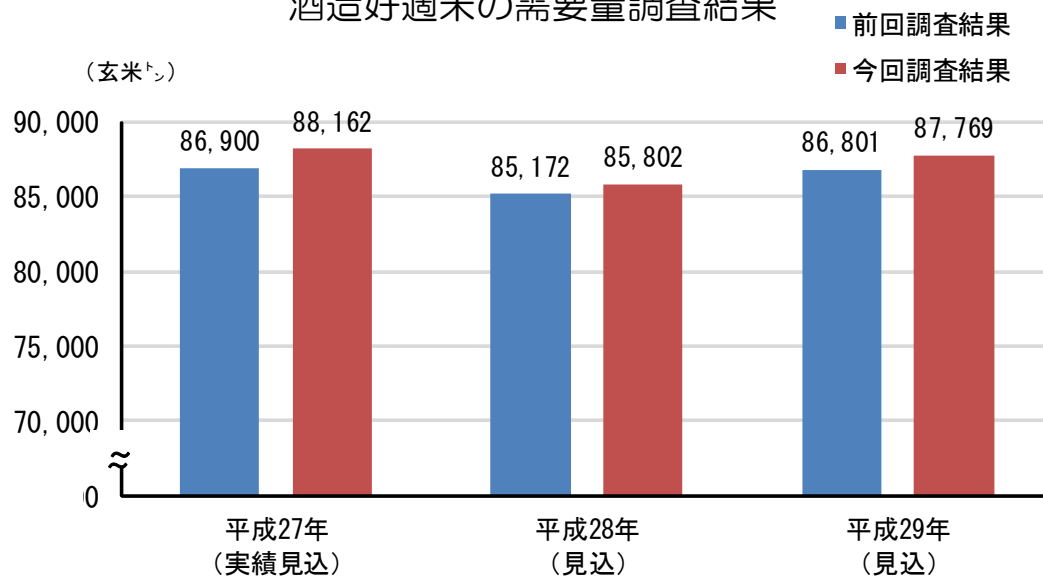
平成29年は、一部の酒造メーカーにおいて、製造計画の変更に伴い、需要量（見込）が増加したため、前回報告より約1千トン多い88千トンと見込まれる。（平成28年比＋約2千トン）

○ 調査概要（前回調査との比較）

	前回調査	今回調査
調査期間	平成28年7月～9月	平成28年11月～12月
調査対象メーカー数	全酒造メーカー 1,500社	前回調査回答酒造メーカー 955社
回答酒造メーカー数	955社	157社

（酒造メーカー955社の需要量（平成27年）の農産物検査数量に対するカバー率81％）

酒造好適米の需要量調査結果



○ 今回調査結果の状況

(単位: 玄米ト)

	需要量 (今回調査結果)	前年産との比較
平成27年 (実績見込)	88,162	—
平成28年 (見込)	85,802	▲ 2,360
平成29年 (見込)	87,769	+ 1,967

○ 前回調査結果と今回調査結果の年産別比較

(単位: 玄米ト)

	需要量		差 ②－①
	前回調査結果①	今回調査結果②	
平成27年 (実績見込)	86,900	88,162	+ 1,262
平成28年 (見込)	85,172	85,802	+ 630
平成29年 (見込)	86,801	87,769	+ 968